

## 令和4年度 日本大学大学院特別講義（英文学専攻）

・10月14日（金）4・5時限目、10月21日（金）4・5時限目

原 英一先生（東北大学名誉教授）

「カズオ・イシグロの文学」

・11月9日（水）3・4時限目

成田 雅彦先生（専修大学国際コミュニケーション学部教授）

「ハナ・ダストン、ホーソーン、マニフェスト・デスティニー」

・12月15日（木）4・5時限目、12月22日（木）4・5時限目

堀田 隆一先生（慶應義塾大学文学部教授）

「英語史にみられる4つの潮流」

## 「カズオ・イシグロの文学」

原 英一（東北大学名誉教授）

2017年にノーベル文学賞を受賞した日本生まれのイギリスの小説家カズオ・イシグロ（1954年生）の文学について論じる。イシグロの作品は非常に多様なサブジャンルにわたっている。最初の2篇、*A Pale View of Hills* (1982)と*An Artist of the Floating World* (1986)は、夏目漱石や川端康成などの古典的日本近代小説のような趣があり、Man Booker Prizeを受賞した*The Remains of the Day* (1989)は、がらりと変わって、Evelyn WaughやE. M. Forsterを想起させる伝統的イギリス小説であった。次に発表した*The Unconsoled* (1995)はFranz Kafkaの『城』のような不条理小説、*When We Were Orphans* (1982)は探偵小説、*Never Let Me Go* (2005)はSF、*The Buried Giant* (2015)はJ. R. R. Tolkienを思わせるファンタジー。最新作、*Klara and the Sun* (2021)は、ロボットを主人公としたもので、再びSFとなっている。しかし、こうした多様性にもかかわらず、イシグロの本質は変わっていない。それは「沈黙の語り」という、日本文学的なものである。この講義では、イシグロが、「語らない」ことによって、何を「語っている」のかを明らかにする。

## 「ハナ・ダストン、ホーソン、マニフェスト・デスティニー」

成田 雅彦（専修大学国際コミュニケーション学部教授）

17 世紀に生きたアメリカ植民地時代の女性、ハナ・ダストンの事件に焦点を当て、その事件が当時の、また 19 世紀の、そして現代のアメリカを形成する上でいかなる重要性を持ったかを、そしてその事件がホーソンをはじめとした文学者たちによってどのように描かれたかを検証する講義にしたい。ホーソンには"The Duston Family"というスケッチ風の作品があり、これがハナ・ダストンの事件を直接に扱っている。講義では、まずこの作品を受講者と一緒に精読することに 1 時限目を費やし、その上で、2 時限目ではホーソンがそこで何を語っているか、またそれは当時の歴史的、国家的イデオロギーの中でいかなる意味を持っていたかを特にマニフェスト・デスティニーとの関連の中で検証していくことにする。目標とするところは、19 世紀のアメリカにおいて、女性と政治がいかに結びつき、そしてそれが文学者によっていかに後押しされ、あるいは反撃されていくかを確認することである。

## 「英語史にみられる4つの潮流」

堀田 隆一（慶應義塾大学文学部教授）

本講義では、1500年以上にわたる英語の歴史を概観し、文法、語彙、綴字、標準化という4つの観点から、歴史を通じてみられる大きな潮流を指摘し議論する。(1) 英語の文法は古英語から中英語にかけて大きく変化し、言語類型として総合的言語から分析的言語へと舵を切った。この変化に関わる言語内的・外的な要因について検討する。(2) 英語の新語導入の主たる方法は、時代によって語形成と借用の間で揺れてきた。この揺れに注目しながら、古英語から現代英語までの語彙史を俯瞰する。(3) 英語の綴字は発音との乖離が大きいといわれるが、中英語まではさほど乖離はみられなかった。近代英語以降の綴字の標準化に焦点を当てつつ、綴字史を論じる。(4) 英語は歴史のなかで標準化と脱標準化を繰り返してきた。現在注目されている世界英語（World Englishes）の現象を念頭に、歴史的な（脱）標準化の主体は誰だったのかを考察する。